新岡垣風土記 第434回

古文書で探る庶民のくらし
―唐津街道と測量日記―

岡垣歴史文化研究会　羽山　健一

1813（文化10）年10月5日、伊能忠敬が芦屋宿と赤間宿を結ぶ唐津街道（芦屋道）を測量した。

今回は、忠敬の「測量日記」と町内の唐津街道の道筋を紹介する。

十月五日　晴天。六ッ時前後、赤間村を出立。

午前6時頃に赤間宿を出発。伊能忠敬外4名は、城山峠から芦屋までの測量を担当した。

遠賀郡（福岡領）上畑村（昨日打止めの㊤印から初め、芦屋道を測る）枝笠松（矢矧川石橋二間）

忠敬は城山峠から測量を開始。峠の途中から麓の赤鳥居がある丁字路にかけて2～3戸の農家が在った。ここが上畑村の枝郷笠松村で、その前を通り矢矧川を渡って海老津村に入る。赤鳥居の北西側の太陽光発電施設前の旧道である。この辺りの矢矧川は川幅が狭く、上畑川、蔦岳川と呼ばれていた。

海老津村（左三十間計り上に祇園社あり、小休、百姓半右衛門、矢矧川土橋五間）

旧道を進むとガス販売業の「伊規須商事」の裏に出る。さらに進んで県道を斜めに渡り、デイサービス業の「サンライト海老津」の前に出る。再び県道を斜めに渡り海老津区の集落に入る。「報恩母の家」前の旧道で、道なりに進む。

集落の上の祇園社は、明治維新で白峰神社に合祀されたとされているが、詳細は不明である。

伊能忠敬測量隊は、集落内の半右衛門の屋敷で休憩した。半右衛門の出自は不明である。

さらに集落内の旧道を進み、県道に出る。県道を少し進み右折して海老津駅の真下に出て、第二白谷橋を渡る。

土橋は、木製の橋に土砂を敷き均した当時の一般的な橋である。

道なりに進み山田村に入る。東部公民館前の町道である。この辺りから街道の両側の松並木が1キロメートル以上続くのである。

山田村（同断、石橋四間、左三十間計り森中に鎮守八幡ノ社、祭神国常立尊、神功皇后、応神天皇）

さらに進み、高陽団地入口の急坂下の十字路を直進して県道を渡り、山田小学校の下に出る。この辺りに道の両側に塚を築いた町内唯一の一里塚が在った。さらに直進して山田橋を渡り、山田区の集落に入る。集落内を道なりに進むと氏森神社（鎮守八幡の社）の鳥居の前に出る。さらに進んで集落を抜け、矢矧川に沿って進み糠塚村に入る。

糠塚村（仮立場）、右側尾崎村、左側芦屋村枝粟屋

川沿いを進み、橋を渡って糠塚区の集落に入り、須賀神社の下を通る。町道を道なりに進み、集落を抜けて国道に到る。

仮立場は、人足や馬の交代、補充をする仮設の休憩所であるが、所在不明である。

国道を北上して坂を上り詰めた辺りが糠塚村の村境である。さらに国道を北進して「遠賀郡消防署芦屋分署」の前を通り、粟屋の三叉路横の「木原酒店」前の町道を直進して集落を抜け、芦屋宿に到るのである。

九ッ時前、芦屋市場町着。止宿。

正午前、測量を終えて芦屋宿の本陣に到着したのである。

伊能忠敬測量隊は、城山峠から芦屋宿までの距離2里25町27間余（10・63キロメートル）を移動、休憩時間を除くと5時間余りで測量したことになる。驚異的な速さで、熟練の成せる業である。

図版は、伊能忠敬の測量で完成した「大日本沿海輿地全図」の大図で、米国議会図書館所蔵である。